

「ありがとう、  
ありがとう。  
ありがとう、  
先生！」

第1話

當眞嗣朗

「ありがとう、ありがとう。ありがとう、先生」

## 第1話

當眞嗣朗

「誰かを悲しませてはいけない。出来れば、誰かが喜ぶような事をしたい。誰かに嫌われても、誰かを恨むよりは遥かにマシだし、誰かを愛する事は、誰かを失う事と同様に辛い事だ。自分を救うという事は、どこかで誰かの救いになっている事だし、それは同時に誰かの不幸とも幸福とも成りうる。ヒトは目に見えない鎖で互いに互いを縛りあっていて、それが断ち切られる時、悲しみがやってくる。ぼくは誰かに愛を告白出来る立場にはないけど、その一言が誰かの重荷になる事もある。誰かの誕生日が、誰かの命日だという事もある。今日、産まれてくる命が、別の誰かの命と引き換えの場合もある。ヒトはどこかで笑っている。ヒトはどこかで泣いている。だからといって、ヒトを愛する事を怖れちゃいけない。その繋がりは必ずヒトを幸福にするよ」

トウマはそう考えながら、眺めていた。テレビの中で、あまりにも非現実的な巨大津波が多くのものを押し流してい

く様子を。その日からもう長い月日が経ったが、復興はまだまだ進んでいないという。だからこそ復興ビジネスとかいう、嫌な響きの商売が流行ったりするし、募金をして、そのお金がどこへ消えたのか判らない状況が続いている。その世界は確実にあるのに、自分の居場所からはその全体像がよく見えない。沖繩で吹く風は被災地でも吹いているはずだ。それなのに。本当に、自分は生きているのか、と自問自答しながらも、空腹を感じては、食欲を満たして生きている。トウマは自分を卑しい人間とは思わない。ただ、もう誰かを愛するなんて不可能だ、と感じているだけだ。どうやら俺は、死んでいるのに生きている、と。言わば、そこに横たわる死体なのだ、と。

「彼は比較的、穏やかな性格の持ち主だったと思います」と、その定年間近の女教師は言った。落ち着きのある安定した声音で、聞いていると学生時代の道徳の授業を思い出した。白髪の混じった頭髮は、すでに黒い髪の毛の比率が少ない。着ている服は身体を動かすのに適したもので、上はポロシャツに、下はトレーニングパンツだった。決して上品なものではない。しかし小学校の応接室で向かい合ってソファに座っていると、どこかしら品の良さを感じさせてしまうのも事実だ

った。

「彼の事はよく憶えているんです」と、彼女は言葉が続けた。

「彼が小学校を卒業した頃、わたしは一度、結婚を期に、教員生活を引退していただきます。その後、主人の実家がある岡山県で主人の妹が経営する喫茶店を手伝っていたんですが、その頃、彼から一枚のハガキが届いたんです。内容は他愛のないものでした。お元気ですか、で始まる文面で、型どおりの挨拶を終えた後、自身の学生生活について少し書いていて、その後、それではお元気で、で終わっていました」

「そのハガキを受け取って直ぐ、わたしはあの子が書いたものだど悟りました。彼は、わたしが教員になって初めて受け持ったクラスの子で、とても印象深かったです。それから、彼の通っている中学校に電話をいれました。とにかく嬉しかったし、どういう経緯で彼がこれを送ってきたのかが知りたかったのです。どうやら国語の授業の一貫で、昔、お世話になった教員にハガキを出すというものがあつたのだという事が判りました。だから彼は、わたしに特別な想いを持って送ってきたのではありませんでした。しかし彼がそれまでに巡り合つた大勢の教員のなかから、わたしを選んでハガキを書いてくれたという事実が嬉しかったし、なにより教師生活

というのは多くの教員の方々が感じるように苦勞の多いものですから、それが報われたような気持ちになつて、感激したのです」

この女に話を聞けて良かった、とトウマは思った。人間の人格形成に於いて、小学生の頃に出会つた教師というのは大きな影響を与えるものだ、と彼は考えていた。特に男の子の場合、女性教師が与える影響は大きい。だからわざわざ、彼の通つていた小中学校の卒業アルバムを手がかりに、かつての担任教師とコンタクトを取る事にしたのだ。大半の教員とは連絡がつかないか、すでに物故しているか、連絡がついてもこの件とは関わりたくないど拒絶する人々ばかりだった。だからこの女に出会えたのは本当に偶然だったのだ。しかし、この女の話には、彼の内面に迫る何かがある、とトウマは感じていた。

「学校での彼の態度はどのようなものだったのですか？」と、トウマは丁寧な声音で訊いた。

ええ、と彼女は言つて顎を引き、視線を一旦下へ落とした後、遠い過去の記憶を昨晩の献立を思い出すかのような口調で答えた。「彼は非常に大人しい生徒で、お友達の数も多く

はありませんでした。休み時間になるといつも机に座って、じっとしている事が多かったのですが、たまにわたしの席にやってくる、仕事をしているわたしの傍で、その様子をじっと見ていることがありました。その当時、教室のなかに、職員室とは別に教員が仕事をする専用の机がありました。休み時間になると決まってクラスの女の子たちがわたしの周りに集まってきて、他愛のないお喋りをしたりするのですが、彼はその輪にたまに加わっていました。そうですね、彼は男の子の友達が少なかつたんだと思います。以前、興味があって彼が幼稚園に通っていた時の文集を見せてもらったのですが、自分のお友達の名前を書く欄を見ると、彼の場合、全員が女の子なんです。女性的だったというわけではありません。性格的に、荒っぽい男の子の遊びには加われないところがあったのだと思います。女の子たちもそれを承知しているからかっさりしていましたから。彼も少し、それを気にしているところがあったと思います」

「学業のほうは申し分ない成績でした。特別に優れているわけではないのですが、成績表は五段階評価で、五が多かったですし、悪くても四か三程度で、授業も熱心に聞いているんです。たまにどこか上の空の時もありました。そんな時、何

を考えているのかと訊くと、お話を考えていたというんです。どんな話なのか、と訊くと、今はまだぼんやりしているけれど、動物が出てくる、と彼は答えました。お話を考えてどうするのか、と重ねて訊くと、判らない、と彼は答えました。ただ、たまに頭の中にお話が生まれるのだ、と。彼は将来、何かそういう創作的な分野で活躍する人間になるのではないかと、とわたしは考えていました。実際、国語の授業で作文を書かせたら、とても良く出来た作文を書くのです。そのクラスでの一年が終わって、終業式を終えた後、わたしは教室で、生徒たちを前にして涙を流しました。初めて担当するクラスで、最初は不安で一杯だった、でも無事に終わって今はほっとしている、みんなもこの一年で随分成長したと思う、とわたしは言って、彼らに感謝しました。最後に、一人ひとりと握手をして別れる事にしたのですが、その時、彼に言われた言葉があるんです」

「うまく言えないけれど、先生は、最後まで、ぼくの事を無視していた。それが嫌だった、と」

「無視していた？」と、トウマは言った。言葉の裏表を検分するように慎重な声音だった。「でも、先生は随分、彼の事

を気にかけていたし、生徒として観察していましたよね？」

「そうなんです、と女教師は頷いた。未消化な気持ちを使い慣れた戸棚の引き出しに仕舞っている、というような表情だった。時折、それを取り出して眺めてみるのだ、とでも言うように。「この仕事をやる上で、私情を持ち込むのは良くないと思うのですが、今でも彼の事をよく憶えているのは、彼が、わたしの兄に、雰囲気がちよつと似ていたからなんです。わたしは兄を慕っていたので、彼の言ったことを子供たちによく言い聞かせていました。彼はそれをじつと聞いているんですね。本当に似ているって思いました。わたしはそれを特別に態度に表したりしませんでしたし、一人ひとりの生徒を公平に、心を込めて観察していました。最初に受け持ったクラスですから余計にそうです。こつちだつて常に緊張していますから。しかし彼は、最後の最後に、わたしにそう言ったのです」

「心当たりはないのですか？」

「さあ、特に思いつきません。もちろん随分昔の事なので、忘れているところがあります。その後、長い教員生活の中で、多くの子供たちを見てきたので、記憶がこつちやになつてい

る部分もあると思います。しかし——」

「そう言って、女教師は口ごもり、顎に右手を当てて、何かを考えていた。記憶の堆積物の中から、何かを取り出そうとしている感じだった。

「彼には、やはり、ちよつとひつかかるところがありました」

「給食の時間なんです。今もそうですが、給食の時間になると当番の子たちが配膳室から食べ物の入った小振りのドラム缶のような容器を教室に運んで来て、クラスの子供たちに配膳します。子供たちは空のトレーを持って、当番の子たちがそこに食べ物をもよそっていくのを並んで待つのです。その時に少し気になる事がありました。ある日、ある女の子が、彼にわざと意地悪をして、食べ物（肉じゃがなんかだったと思います）を少なくいれたんです。ほんのちよつとの分量です。他の子供たちにはたつぷりとよそうわけですから、それは理不尽な意地悪でした。彼は当然、憤慨したようでした。何の理由もなく突然、そんな事をされるわけですから当たり前です。しかし、彼はすぐに気を取り直して、何も言わずにトレーを持って自分の席に戻りました。そして、その少なく入れられた給食を文句も言わずに食べたのです」

「問題はその後なんです。その翌週、彼が給食当番になりま

した。その時、彼は先週、彼に意地悪をした女の子にわざと  
少なく食べ物をよそったのです。まるで、自分は誰かに不当  
な扱いを受けた事を絶対に忘れない、そしてお前にも同じ事  
をする、という感じで。孤独な彼にも、それなりに人間関係  
があるんだな、とわたしは思いました。繋がりはあるけれど、  
それが彼の望んでいるものではないという感じなんです。わ  
たしはその時、それを特に問題にはしませんでした。子供の  
世界ですから、害のない意地悪なんてしょっちゅうあります。  
しかし今になってみると、それが彼の本当の姿だったのでは  
ないか、と覚えてならないのです。その本当の姿を、わたし  
はずっと気づかなかった。それが彼には無視されている、と  
感じられたのではないでしょうか」

その女教師の話は実に興味深いものだった、とトウマは思  
った。すべての話を聞き終え、礼を言って、謝礼を渡し、席  
を立とうとした時、彼女は不安そうな表情で、お役に立てま  
したでしょうか、と言った。トウマは、もちろんです、と答  
えて、改めて礼を言った。すると彼女は何かの責任から解  
放されたような表情になって、身体の緊張を解いたようだっ  
た。

出来れば彼の中学時代の担任教師にも会っておきたかっ  
た。しかし、卒業アルバム住所録を当たってみて、その教  
員がすでに物故している事が判った。

彼に関する情報は極めて限られていた。この情報化社会の  
時代に、彼は、インターネット上に自己の情報を公開する事  
さえしていないのだ。今では自分の住所が他人に洩れる事を  
極度に怖れる人間だって、ブログで細かい自身の情報を公開  
しているのに。トウマは携帯電話を開いて、ある番号を押し  
た。彼には相棒がいた。名前は知らない。便宜的に「バット  
(こうもり)」と呼んでいるが、それが彼の本当の名前であ  
るはずがない。国籍も判らない。顔立ちはオキナワ人のそれ  
だが、身のこなしや思考パターンが、アメリカ人を思わせた。  
細かい事情は互いに詮索しない事になっている。ただ彼は、ト  
ウマが必要なときに、確実に要件を満たしてくれた。もちろ  
ん謝礼は支払う。決して少なくはない額だ。しかし今、彼に  
はバットの力を借りる必要があった。

「彼の中学時代の事を知りたい」と、トウマは言った。

その晩、トウマは奇妙な夢を見た。彼は自宅アパートの寝

室で、ベッドに横になっていた。夢の中で自らが就寝状態にある光景、というのは、そう珍しい事じゃない。頻繁にあるわけではないが、稀にある。夢占いの本で調べれば、そういうのも何かしら意味があるのだろうが、彼は占いに興味はない。その奇妙な夢のなかでとりわけ奇妙だったのは、ベッドに横たわる自分が鎧を着ていたことだ。

歴史書や小説のなかで、中世ヨーロッパの騎士たちが着ているような鉄の鎧だ。顔全体を包むマスクがあり、頑丈な胸当てや手足を防御する鉄製の筒に似た防具が各部を覆っている。それはかなり重かった。寝返りを打とうと思っても打てない。身体の自由が利かなかった。鎧の中は熱帯夜を詰め込んだように暑くて、全身から粘ついた汗が噴き出た。何故、こんなものを着ているのか？ しばらく考えてみて、思い出した。

夢の中で旅行中、宿泊したホテルで、隣の部屋の見知らぬ女が夜、トウマの部屋のドアをノックしたのだ。部屋の明かりが点かないのだ、と。普通、そういうことはホテルの従業員に尋ねるべき事だ、と彼は思った。しかし夢の中の女は真面目な顔をしていた。彼は疑問を感じながら、そういう事もあるものだ、と素直に応じる事にした。隣の部屋に行ってみ

ると明かりが煌々と点いていた。なんだ、大丈夫じゃないか、と言うと、女がトウマに言った。わたしの知り合いに鎧を売っているヒトがいて、これから会いに行くのだ、着いてきてくれないか、と。彼は小首を傾げながらも、すぐに承諾した。夢というものは脈絡がない。筋の繋がらないドラマで、不完全ながらも最後には目覚めて、終わる。

女はバリの街角のような薄暗い道を進んでいき、路地裏にある一軒の古びた家のなかに入ってしまった。そこにはそれほど広くはないが部屋が一間あって、見たこともない不思議な装飾品で飾り付けられてあった。一人の外国人男性がソファにゆったりと腰掛けていた。占い師風だった。その男はトウマを見て、微笑み、言った。いつも考えるのは経済の事だ、と。それから男は続けて言った。いつも考えるのは安全保障の事だ。更に男は言った。いつも考えるのは福祉のことだ。しかし我々が最も考えなければならぬのは、グローバル・ウォーミングなんかじゃない、と彼は言った。それはヒューマニティー・クーリングだよ。つまり、人間性の冷却化だ。それはグローバル・ウォーミングよりも先に人類を滅ぼしかねない。ところで、鎧を買わないか？

トウマは鎧を一式、買う事にしたのだった。寝る前に着る

といい、と男は言った。言われた通り寝る前にその鎧を着て、床に着いた。良い夢を見られるはずはなかった。ただ必死だったのだ。必死になる理由さえ判らない。しかしその時は真剣だった。

目が覚めた時、トウマは彼らがやってきたのを悟った。彼らはいつも寝ている時にやってくる。どうやって入り口の鍵を開けるのか、判らない。もちろん彼らにとってそれは、雑作もない事なのだろう。今晩は三人のようだった。時には五人で来る事もある。一人の時もある。彼らはトウマのベッドの脇に立ち、一人は椅子に座っているようだった。台所のキッチン・テーブルから椅子だけを運んできたのだ。彼らの素顔を窺い知る事は出来ない。暗闇が邪魔をしているのだ。

「我々が求めているのは」と、彼らの一人が言った。「個人を取り巻くあらゆる情報だ。その人間の生い立ちや友人関係、学歴に職歴、そして精神的傾向や思想、昨夜の食事の献立に至るまで。我々はその情報のすべてを欲している。そしてそのすべての情報で個人を包囲するのだ。情報で包囲？ この意味が判るだろうか？ それはつまり、個人の所有するすべてのものを権力者の前に提供してもらう事だ。それは物質だけではない。個人の歴史や心の中まで、という事だ。それを

我々は情報で個人を包囲すると定義している。そうすればヒトは、我々の管理下に収まる。すべての自由を剥奪される。もちろん仮初めの自由はある。しかしそれは我々に管理された上での自由だ。それが嫌なら、拒否するという選択肢もある。勝手にすればいい。しかし今の社会、ヒトとヒトは見えない鎖で繋がっている。それは我々が裏で恣意的に繋げているものだ。そしてそのネットワークは常に我々の管理下にある。その鎖がなければ、人々は満足な社会生活を送ることは出来ない。情報を手に入れる事さえ出来ない。それを拒むというなら、社会を捨てれば良い。文明を捨て、山にでも籠るが良い。完全なる自由を手にいれないなら、死ぬ事を薦める。そこは我々の管理下にはないからだ。それが嫌なら従うしかない。それが現代社会というものだよ。我々がお前に求めているのは難しい事じゃない。あの男に関するすべての情報をあらゆるざらい調べあげ、我々の前に提示することだ。簡単な事だ。象でも出来る」

つづく